

おたふくかぜの予防接種について(説明書)

1. おたふくかぜと合併症について

- ① おたふくかぜは流行性耳下腺炎とも呼ばれ、ウイルスによって起こる病気です。耳の下(耳下腺)の腫れと発熱が主な症状で、2~9歳の頃に多く、3~4歳をピークとしてかかっています。潜伏期間は2~3週間あり、耳下腺が腫れる前7日頃から、腫れた後9日頃までの間は、他人にうつる可能性があります。
学校伝染病の一つに指定されており、耳下腺の腫れが消えるまでは、登校・登園が停止されます。
- ② おたふくかぜの合併症として、無菌性髄膜炎が2~3%くらいに起こっています。また、難聴が数万人に1人程度起こっています。男性が思春期以降にかかった場合は、精巣炎(睾丸炎)を併発することもあり、不妊(男性不妊)症を起こす心配があります。

2. おたふくかぜワクチンの接種について

- ① おたふくかぜワクチンの接種は、任意で受けた方がだけで、接種を受けることになっています。
- ② 接種年齢は、1歳を過ぎれば受けられますが、感染のピークとなる前の3歳頃までに、受けることが望まれます。もちろん、おたふくかぜにかかっていなければ、それ以降の年齢の方や大人でも受けられます。
- ③ 流行期間中に、おたふくかぜの子と共に居合わせたことにより、既にかかっている場合があります。この場合、接種を受けても予防が間に合わず、おたふくかぜの症状が出てしまうことがあります。まわりにおたふくかぜの子がいる場合は、接種を見合わせて下さい。ただし、自然におたふくかぜにかかった時期(潜伏期間中)と、ワクチンを受けた時期が重なっても、特に症状が重くなるような心配はありません。
- ④ おたふくかぜワクチンは、接種を受けた人の90%程度に抗体(免疫)ができると考えられています。また、知らないうちにかかった人(不顕性感染者)など、免疫のある方がこのワクチンを受けても差し支えありません。

3. おたふくかぜワクチンの接種を受けた後の副反応

- ① 接種を受けたすぐ後、まれに急な副反応が起こることがありますので、異常と思われる症状や体調の変化が現れたときは、速やかに医師の診察を受けて下さい。
- ② 接種後2~3週間たった頃、発熱、耳下腺の腫れ、嘔吐、咳、鼻汁などを認めることがあります。しかし、一般的にこれらの症状は自然感染の時に比べ軽く、かつ一過性で、通常、数日中に消失します。
- ③ また、自然におたふくかぜ(ムンプス)にかかった場合に比べて頻度は少ないのですが、まれにワクチンに由来すると疑われる無菌性髄膜炎(発熱、嘔吐、頭痛)、急性の紫斑、鼻出血、難聴のほか、特に思春期以降の男性に精巣炎(睾丸の腫大)が、接種後から3週間頃にあられたとの報告があります。このような症状が現れた場合は、速やかに医師の診察を受けて下さい。

4. 接種を受けてはいけない人

- ① 明らかに発熱している人
- ② 重い急性の病気にかかっている人
- ③ カナマイシン、エリスロマイシン(抗生物質)等の投与を受けて、アナフィラキシー(ひどいアレルギー反応)を起こしたことがある人
- ④ 感染症にかかりやすい等の免疫不全の人
- ⑤ 妊娠している人
- ⑥ その他、医師が接種に不適當な状態と判断した人

5. 接種を受けるにあたって、注意が必要な人

上記の4. ②書かれた人以外に、医師が接種を行うに際し注意を要する人があります。

「おたふくかぜ予防接種の予診票」は正確に記入し、体に気がかりなことがある方は、医師にご相談下さい。

6. 接種を受けるときの注意

- ① 接種は体の調子がよい時にだけ受けて下さい。

- ② 元気がない、きげんが悪い、食欲が進まないなど、ふだんと変わったことがあれば、医師に相談して下さい。そのような時は無理をせず次の機会に受けて頂いても結構です。
- ③ 体温は、家を出る前にはかかって下さい。
- ④ 入浴は、できるだけ接種前日にすませ、体を清潔にしておいて下さい。
- ⑤ 「母子健康手帳」を、接種を受ける日に持参して下さい。

7. 接種を受けた後の注意

- ① 接種した部位は清潔に保ってください。接種当日の入浴はさしつかえありませんが、接種部位をこすることはさけてください。
- ② 接種当日は激しい運動はさけてください。そのほかはいつも通りの生活で結構です。
- ③ おたふくかぜワクチンは生ワクチンですので、接種1カ月近くは体内で弱毒ウイルスが生きています。この間は、副反応の発見や体調の変化に気をつけてください。
- ④ もし、高熱、けいれん、その他異常な症状が出た場合は、速やかに医師の診察を受けてください。

医) 紘生会かわかみこどもクリニック